

恒川遺跡群

平成6年度範囲確認調査概報

1995・3

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群

平成6年度範囲確認調査概報

1995・3

長野県飯田市教育委員会

序

座光寺地区は、古代から文化の開けた土地で、古墳や古代の各種の遺跡があります。当恒川遺跡群は、R153号バイパス建設に先立つ調査で、古代伊那郡衙址の所在した場所と確実視されました。昭和57年度から、国・県の補助を受けて重要遺跡範囲確認調査を実施中で、本年度は12年目になります。

平成4年度は、中間的な総括を文化庁の松村恵司先生・奈良国立文化財研究所の工業普通・山中敏史先生・県市の関係者など22名をもって美術博物館で行ないました。ほぼ郡衙に間違いは無いが、決め手に欠けているので確証を把握してほしいと、結論付がなされました。

その結論から、平成5年度は宅地・永年作物の間を調査しました。面積が少なく、直接郡衙に結びつく資料の発見は無かったのですが、竪穴住居址3棟・穴等の成果を上げることができました。

今年度は、平成5年度の場所からほぼ北の2カ所をお借りして調査を行ないました。前年同様果樹園の間を調査するという、制約がありました。

座光寺のバイパス両側は、民間の開発が著しく空間が無くなりつつあります。それに伴って緊急発掘を実施し、郡衙に付くらしい遺構・遺物が出土しました。バイパス両側のみでは確証が得られていませんが、遺跡の重要度はますます強くなってきました。

発掘場所等検討しながら、今後も引き続き調査を進めてまいる所存であります。

最後に、本年度の範囲確認調査を実施するに当たり、多くの方々のご理解、ご協力をいただきました。土地を提供していただいた地権者及びご迷惑をおかけした隣接地の方々、また調査に従事していただいた作業員の方々ほか関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例 言

1. 本書は古代伊那郡衙の内容解明と保護を進めるため、国・県の補助を受け平成6年度に実施した恒川遺跡群範囲確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会の直営事業として、地元座光寺地区ほか多くの方々の協力を得て実施した。
3. 本書は調査員全体で協議の上、佐々木嘉和が編集・執筆し、小林正春が加筆訂正・総括を行った。
4. 調査地点の番号は、本調査が継続事業でまた遺構群総体を検討する時点の簡略を図るため、昭和57年度以降連続した番号である。本年度調査地点は2ヶ所あり第16・17地点である。
5. 本調査地点は、これまで数次にわたり範囲確認調査・緊急発掘調査を実施した栗師垣外地籍の一画に位置し、地形等勘案すると倉垣外地籍と一連のものである。調査開始より一貫して略号YKSに地番の4684-1・4754を付して使用した。遺構番号については大半の遺構が検出作業のみの確認にとどまったが、以前の調査からの一連番号とした。
6. 調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づき、(株)ジャステックに委託実施した。調査地点の番号は、LC75・9-34である。(中村中平遺跡報告書参照)
7. 当調査で出土した遺物及び記録された図面・写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

I 調査経過	1
II 調査組織	1
1. 調査団	1
2. 指導	4
3. 事務局	4
III 調査の概要	5
1. 調査地点の概要	5
2. 調査	5
(1) 調査区の設定	5
(2) 基本層序	5
(3) 遺構	9
(4) 遺物	10
IV まとめ	11

挿図目次

第1図 恒川遺跡群の位置	2
第2図 調査位置及び官衙的遺構分布概要図	3
第3図 平成6年調査位置図	6
第4図 土層図 (YK S4754・YK S4864-1)	7
第5図 YK S4754遺構分布図	7
第6図 YK S4684-1 周辺図	8
第7図 YK S4684-1 遺構分布図	9

写真図版目次

- 図版 1 薬師垣外遺跡 4754 調査前・薬師垣外遺跡 4754 全景
- 図版 2 薬師垣外遺跡 4754 掘立柱建物址 5プラン・薬師垣外遺跡 4754 掘立柱建物址
5土層断面
- 図版 3 薬師垣外遺跡 4684-1 調査前・薬師垣外遺跡 4684-1 全景
- 図版 4 薬師垣外遺跡調査スナップ・薬師垣外遺跡重機スナップ

I 経 過

本年度の調査は、前年度地点（15）のほぼ北東50mと100mである。

当調査地点は、平成4年度の検討会で指摘された官衙域の外周付近に当たる。地権者・耕作者のご厚情により調査を実施することとなった。

12月1日確認発掘調査に先立つ諸資材の準備を行ない、ミニバックホーで耕土の排土を済ましてから5日着手した。当調査区YKS4754の畑は16×29mの長方形であり、その約半分を調査した。YKS4684-1の畑は25×35mの桃畑で、調査面積は3×9mである。YKS4754は調査が終わった所へ土を入れながらになったので、調査区全体の写真は無い。

YKS4684-1の調査は、表土から基盤の黄色砂質土まで60cm弱と浅く、遺構が少なかったので、順調に進み12月16日すべての発掘調査を終了した。

YKS4754の調査は、建物址の範囲確認とそれを文化庁に指導を仰ぎ、平成7年3月14日に松村恵司文部技官が現地を視察し、郡衙であると確認され今後の調査方法を指導してくれた。その指導を受けて再度の発掘調査を3月17日より開始したが、今回の調査では本観報に記述できないので3月14日以降は、7年度の観報に記載する。

3月14日以後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類及び出土遺物等の基礎的な整理作業と、当概要報告書の作成作業を行なった。

II 調 査 組 織

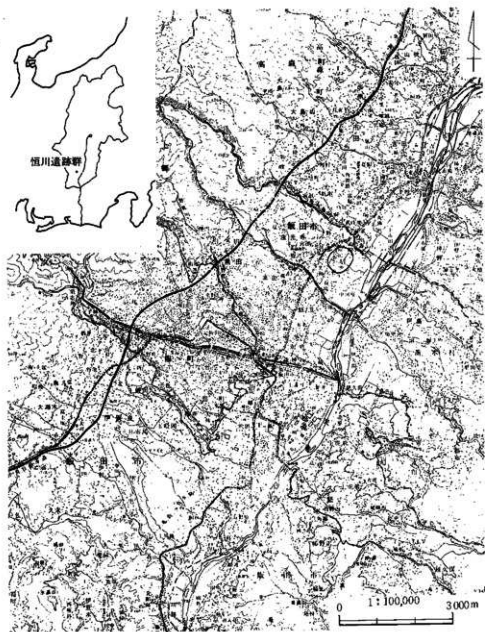
1. 調査班

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和・吉川豊・馬場保之・福澤好晃・吉川金利・下平博行・伊藤尚志

発掘作業員 今村勝子・今村春一・北原森作・熊谷義章・小池金太郎・小池千津子
小池寛希・小島妙子・坂下やすゑ・中平隆雄・原田四郎八・福沢トシ子
細井光代・正木実重子・柳沢謙二・山田三保子・吉川正実

整理作業員 新井ゆり子・池田幸子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗
木下玲子・榊原勝子・小平不二子・小林千枝・斎藤徳子・佐々木真奈美
佐々木美千枝・佐藤知代子・関島真由美・田中恵子・中島真弓・丹羽由美
萩原弘枝・樋木宣子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・古根素子・牧内喜久子



第1図 恒川遺跡群の位置



- 1、第1地点(57年度) 2、第2地点(57年度) 3、第3地点(57年度) 4、第4地点(57年度)
 5、第5地点(58年度) 6、第6地点(58年度) 7、第7地点(59年度) 8、第8地点(60年度)
 9、第9地点(60年度) 10、第10地点(61年度) 11、第11地点(62年度) 12、第12地点(63年度)
 13、第13地点(元年度) 14、第14地点(2年度) 15、第15地点(5年度) 16、第16地点(6年度)
 17、第17地点(6年度) A・B、新屋敷遺跡掘立柱建物址 C・D、恒川B地籍掘立柱建物址群
 E、恒川A地籍掘立柱建物址群 F、田中地籍掘立柱建物址群

第2図 調査位置及び官衙の遺構分布概要図

牧内八代・松本恭子・松島直美・三浦厚子・南井規子・宮内真理子
森藤美知子・吉川悦子・吉川紀美子

2. 指導

文化庁

奈良国立文化財研究所

3. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

横田 稔 (社会教育課長)
小林 正 春 (社会教育課文化係長)
吉川 豊 (社会教育課文化係)
馬場 保 之 (")
福澤 好 晃 (")
吉川 金 利 (")
下平 博 行 (")
伊藤 尚 志 (")
岡田 茂 子 (社会教育課社会教育係)

III 調査の概要

1. 調査地点の概要

今回調査を実施した地点は座光寺薬師垣外地籍に位置し、平成5年度に調査した第15地点のほぼ北東50・100mの2地点である。第15地点では、弥生時代中期の竪穴住居址1棟、古墳時代後期の竪穴住居址2棟と、官衙址に付属すると考えられる掘立柱建物址の柱穴が確認されている。

国道153号座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査では、今回の地点からすべて東から南であるが、大型の掘立柱建物址群等多数の遺構が調査され、南西300mの竪穴住居址からは、和同開珎銀銭・鉄鈴、その付近から踏脚硯・円面硯片等の官衙的遺構・遺物が出土した。

またバイパス周辺の開発に伴う緊急調査では、奈良・平安時代ほか各時代の掘立柱建物址・竪穴住居址が重複した状態で検出され、官衙の周辺に展開する居住空間である可能性が高まった。平成元年度実施された緊急調査では、大型の掘立柱建物址の他に二彩釉陶器片が出土しており、この地点が官衙の中でどのような機能を果たしたかある程度類推できる結果が得られている。

平成4年度の恒川遺跡群検討会で、恒川清水（湧水）の北～西方向が官衙の中心であろうと集約され、その方向で発掘可能地点を探した。

官衙の外周にかかると思われるYKS4754は元桑畑で地権者の了解が得られた。YKS4684-1は桃の更新がなされて幼木であったので、地権者と交渉し木の間を調査する事を了解してもらった。

2. 調査

(1) 調査区の設定

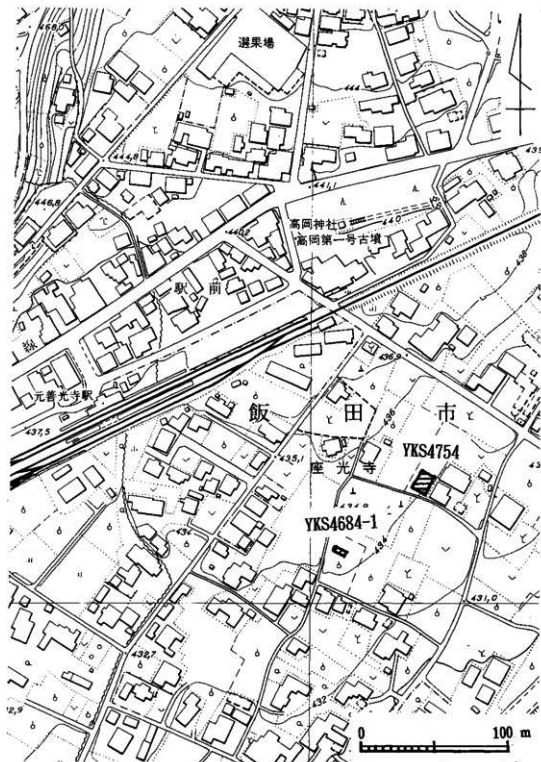
飯田市全体に設定した国家座標に載ったメッシュに合せて調査することにし、(株)ジャステックに基本杭を設定してもらった。メッシュは、最少単位2×2mのグリッドで、アルファベットと0～49を組み合わせた名称が付いているので、2地点共にそのまま使用した。面積はYKS4754が234㎡で、YKS4684-1が27㎡である。

(2) 基本程序

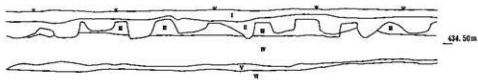
① YKS4684-1

この調査地点の土層堆積状態は、地表から黄色質砂土まで70cm前後と薄い。

この調査区には、地表から2層目に俗に云う未満水で堆積した黄色砂が無い。この堆積土が無いのは、12・14・15地点(第2図参照)で、当調査区南東50mの6地点に



第3図 平成6年調査位置図



葉師垣外遺跡4754 土層図

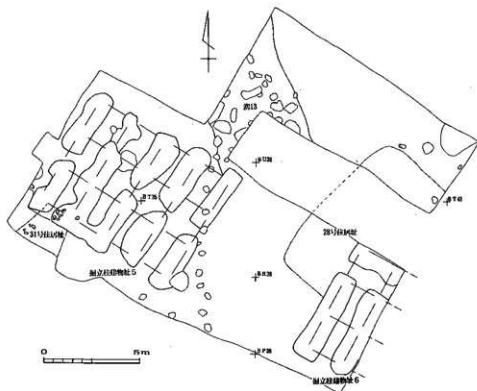
434.50m



- I 黒褐色土（耕土）
- II 褐色土黄色砂混じり
- III 黄色砂（正徳5年未満水の土砂）
- IV 黒色土
- V 暗褐色土
- VI 黄色砂質土層混じり（基礎）
- W 擾乱

葉師垣外遺跡4684-1 土層図

第4図 土層図 (YKS4754・YKS4864-1)



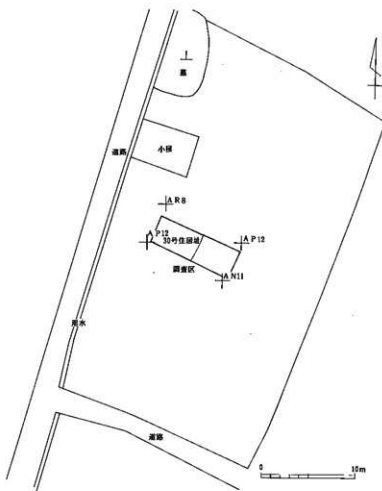
第5図 YKS4754遺構分布図

はわずかに認められる。この事から6地点と当調査区には比高差がわずかなり高く、北西は12・14地点から約100m先に、比高差が有る事が現地地形から推測できる。

層序は、地表から耕土・黒色土・黄色砂質土混じり暗褐色土・黄色砂質土（基盤）の4層である。層厚はそれぞれ15cm、20cm、35cm前後で、遺構は2・3層で確認した。耕作の攪乱はほとんど入っておらず、礎石は地表下30cmに検出した。30号住居社のカマドは調査区壁ぎわに検出した。

② YKS4754

この調査地点の土層堆積状態は、第4図のごとくであり地表から基盤の黄色砂土まで1m強と厚い。耕土の下は俗にいう未満水の氾濫砂のかぶり、黄色砂が10～20cm堆積し下面是畝があった様子で、波状に上下している。その下は黒色土が45～55cm堆



第6図 YKS4684-1周辺図



第7図 YKS4684-1遺構分布図

積し、下部から大平鉢・白磁片が出土しているので、中世以降の層である。その下は暗褐色土で10～20cmあり、総柱の掘立柱建物址2棟と古墳時代後期の住居址3棟・中世の住居址1棟が確認できた。建物址の範囲内でこの層の上面から、緑釉陶器の破片が出土している。その下が基盤の黄色砂になり、そこに弥生時代中期の溝が北から南に、調査区域を斜めに走っている。

以上から、16地点は小段丘の先端に近く、17地点はわずかに低く未満水の氾濫を被ったものであり、堆積は厚く遺構残存状態は非常に良いと云える。16地点の遺物は2～3層から多く出ており、土師器が多く須恵器がわずかに混じる。17地点では3～4層から中世～弥生時代中期遺物が多く出土し、主体は古墳時代である。

(3) 遺 構

① YKS4684-1

この地点で確認された遺構は礎石2個・竪穴住居址1棟である。

礎石は、地表から30cmの所にあり約30～40cmのほぼ円形で2個確認した。地表から浅かったので、つながると思われる石をボーリングピンで探したが確認できなかった。時期の比定はできないが中世であろう。竪穴住居址は1軒で30号住居址を付け、時期は古墳時代後期である。

② YKS4754

この地点で確認された遺構は竪穴住居址4棟・掘り込みの不明な住居址1棟・掘立柱建物址2棟・溝址1基・穴列1基・穴多数である。

竪穴住居址には28・31・32号住居址、床のみの住居址には29号住居址を付け、28・31・32号住居址の時期はすべて古墳時代後期、29号住居址は中世である。

掘立柱建物址にはそれぞれ建物址5・6を付けた。建物址5のみ1列の断割りを行ない柱痕を確認した。柱痕は30cm前後あり、上部の大きくなったものがあり抜き取ったものと判断した。3×4間の総柱で芯々1.8～2.1m、柱穴は2本づつの布掘りである。

建物址6は3間2列を確認し、3本の布掘りと、3本の布掘りに直交する次の列との布掘りである。建物址5と6の掘り方は違った方法である。

時期は緑釉陶器、須恵器の長頸瓶・坏等の破片から、奈良時代終末であろう。

(4) 遺物

① YKS4684-1

調査区からは、古墳時代の土師器片が主体である。弥生時代後期土器片が少量混入し、須恵器もわずかに混じる。土師器は住居址につくものであろう。甕・高坏・石器等の破片である。

礎石はそのまま埋め戻した。

② YKS4754

調査区から出土した遺物は、弥生時代中期から中世である。弥生時代中期遺物は、溝址13に関係する物である。溝址の時期を確認する為、掘り下げたら多量に出土しすぎ止めた。

古墳時代後期遺物も、住居址28に起因する遺物であり、北隅近くに完形の甕があった。奈良時代末と思われる須恵器長頸瓶・坏、灰釉陶器の大形の坏は建物址5・6の掘り方内から出土しており建物址と同時期と考えて良いであろう。建物址6の掘り方から甕鉋が1本出ている。

中世遺物は、建物址5の掘り方上部に床状に堅い面があり、そこから大平鉢片が出土した。又、直径30cm前後の柱列から、山茶碗等が出土した。

IV ま と め

昭和57年度より継続実施している飯伊確認調査も、平成3年度は官衛的遺構分布図の作成、平成4年度は文化庁の松村恵司・奈良文化財研究所の工業普通、山中敏史・県、市の関係者各氏をお願いして、恒川遺跡群検討会を行なった。為に発掘調査は2年無かったが、昨年度は検討会で指摘された位置範囲に該当する場所を、調査することができた。しかし農作物制約の為、やや面積が少なく、遺構・遺物共郡衙址に直接結び付く発見はできなかった。

今年度は調査地点が薬師垣外地籍で、2ヶ所調査し1ヶ所は範囲からははずか外れ、もう1所は地主の承諾が得られたため、平成5年度調査区から北50mの位置で指摘された範囲内に該当し、郡衙に結びつく遺構の発見を期待したわけであるが、杭の間で3×9mと調査区が狭い。

両方の遺跡略号に番地を付け、YKS4754・YKS4684-1として区別した。YKS4754から、布掘りの掘り方をもつ3間×4間の総柱の掘立柱建物址2棟を検出した。断面から柱間は1.8mと2.1mであり、柱痕は幅30cm前後把握できる。柱根の上部が広がったものもあり、抜き取りを想定できる。2棟の間は7mで、少量ではあるが炭化米の散布が見られる。

規模が大きいのので、県をとし文化庁に派遣指導をお願いしたところ、1棟掘り上げられないかと指導があり、隣の地主をお願いし1棟を確認することにした。広げたところ桁行5間梁行3間あり、掘り方の外側で8×7mの規模であった。遺物はごく少ないが、内側に返りのある須恵器の硯(台の部分で長方形の透かしから透かしの間5×6cm)・蓋・長頸瓶・美濃須恵器等の破片と炭化米である。

3月14日(火)、文化庁から文部技官松村恵司氏が調査指導にみえられ、規模から正倉に違いは無いから、掘り方・柱痕・柱抜き取り痕を精査し、柱間の距離を正確にすること。又正倉の範囲は方1町(約100m)で、溝で周囲を囲んでいるから、それを確認してほしいと今後の調査方向を示してくれた。

今年度、郡衙が確認できたのは、昭和57年度から今年度までの調査結果の蓄積である。正倉が発見できれば、後は政庁を確認し周辺遺構の性格づけをしなければならない。

今年度、比較的広く調査ができたが、今後は狭い面積でも遺構の予想位置が想定でき、郡衙城の確認は今までよりすすむであろう。

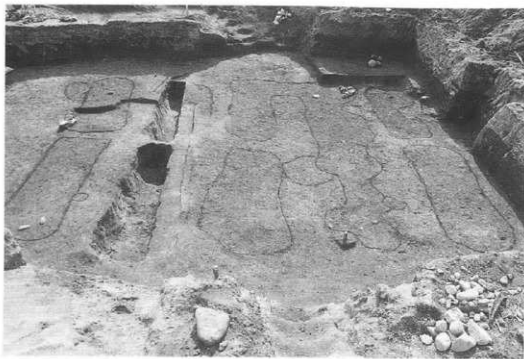
写 真 图 版



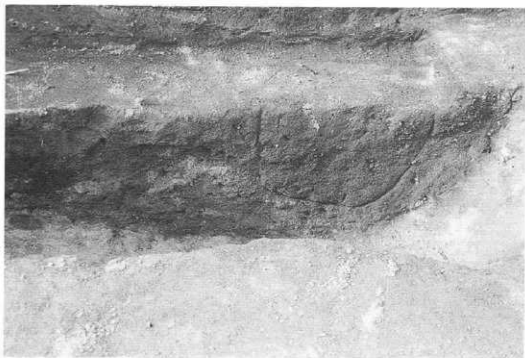
栗師恒外遺跡4754調査前



栗師恒外遺跡4754全景



薬師恒外遺跡4754掘立柱建物址 5 プラン



薬師恒外遺跡4754掘立柱建物址 5 土層断面

図版 3



薬師恒外遺跡4684-1調査前



薬師恒外遺跡4684-1全景



薬師恒外遺跡調査スナップ



薬師恒外遺跡重機スナップ

平成6年度範囲確認調査概要

垣川遺跡群

発行日 平成7年3月31日

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145
飯田市教育委員会

印刷 飯田共同印刷株式会社

